



Liberia Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1980 精道教育促進協会(青函)三二・三四五二 芦屋市船戸町12-6

教皇様の叡

マリアへの愛

聖母をたたえよう

子供としての敬いを示そう

ポンペイの「ロザリオの聖母教会」前の広場にもうけられた祭壇で教皇はミサを献げ、そのち再び大聖堂に入って、聖堂のロτζアに立たれた。信者と共に夕べの祈りを唱えるためである。こうしてポンペイ、ロザリオの聖母教会の設立責任者、尊者バルトロ・ロンゴの預言はヨハネ・パウロ二世教皇において成就した。一九〇一年五月五日、ロンゴは次のように預言していたのだ。『いつの日か我々は見るのであろう。世界の平和をたたえて下の広場に集まった人々と、このロτζアのうえからキリストの代理人たる白い服の人物が祝福する姿を。』夕べの祈りを唱える前に、ヨハネ・パウロ二世教皇は次のような短い言葉をお述べになった。

夕べの祈りとロザリオ

夕べの祈りとロザリオの祈りとは、たいへん密接な関係にあります。いずれもキリストと深い関係があり、また、両方ともにマリアの祈りでもあります。じっさい、ふたつの祈りによって、救いの歴史におけるさまざま不思議に思いをめぐらし、救いの秘義について多くを学ぶことができます。救いの秘義のなかで聖母はおん子イエズスのみわざと密接

に結びあわされています。またこの聖堂にはつねにロザリオの祈りがひびきわたっています。ロザリオの祈りはすなおで、謙遜な聖母マリアへの祈りです。しかしだからといって、この祈りが聖書や神学に由来する内容に乏しいわけではありません。ロザリオの祈りは、その長い歴史のなかで、あらゆる階級の人々、あらゆる職業の信者から親しまれてきました。人々の救いのために十字架上で死去し、復活されたキリストへの信仰を告白するという点で、

すべての人々がロザリオの祈りについてひとつに結ばれるのです。

ロザリオの聖母教会の由来

祈りに献げられたこの聖なる場所が生まれたのは偉大な信者、尊者バルトロ・ロンゴの精神と心のなかでした。十九世紀から二十世紀にかかる時代に生きたロンゴは、私たちと同時代の人々なのです。尊者の望みは、神のおん母の光栄をたたえる教会、人間になくさめとよろこび、希望、確信をあたえる教会を建てることであつたのです。

聖母をたたえよう

このあと私たちは一緒に夕べの祈りを唱えますが、その夕べの祈りで思い出すのは、神の子のご託身という奥義を告知する心はずむ情景です。とくに心を張りつめ、献身の思いを抱いて、祈りを捧げるようにいたしましょう。みな心をひとつにして、キリスト教の信仰を宣言したいものです。また神に感謝をささげましょう。神はすばらしいことを数多くなすとげられました。今も偉大なみわざを続けておられます。いずれも祝せられた処女マリアの取り次ぎによるものです。その聖母に、心から、子どもとしてのうやまいをしめしましょう。

このようにして、一緒に信仰を宣言しよう、偉大な聖母へ敬意を公にあらわそうと、わたくしがいま、この場で特に呼びかけたいと思う相手はこの広場に集まっておられる何千というあなたたち、ほかでもない若い人びとのです。

若人よ

愛すべき若人よ。これほど大勢の人が一堂に集い、押えても押えきれぬ熱意を見せてくれているのです。その確信とはキリストのお伝

えになろうとしていることが、死ではなく生であり、古いものではなく新しいもの、悲しみではなく喜びだということであります。このようなことすべてを、あなたと同じ年頃のひとに語りかけましょう。すべての人びとに、語りかけなさい。若さあふれる歌をとおして、若人の理想をとおして、ことあなたにたがたの若いのちをとおして、語りかけてください。預言者イザヤはメシヤの時代を語って、言いました。「荒野は実り多い畑となろう。」(イザヤ22・15)

この地を見わたせば、ローマ時代の都市遺跡を目にしてつよく心を打たれます。西暦七九年、ここは恐ろしい噴火によって「死んだ」街、「死」の都市と化したのです。しかし死が支配しているように見えたところにも、一八〇〇年を経たこんにち、この聖堂が霊的な庭のように花を開かせ始めました。ポンペイは、ご聖母と聖母マリアのいのちの中心、イエズスによって私たちにもたらされ渡されたあの充実を預言する土地なのです。

マリアを見、マリアを愛し、マリアにならなさい。

愛すべき若ものたちよ。聖母マリアをこらんなさい。マリアを愛しなさい。マリアにならなさい。神に対して完全に開かれた聖母の心にならなさい。よるこんで神の心のままにしたがう召し使い、と聖母は自分の態度を告白しているほどです。助力となくさめを求めている兄弟たち、隣人たちに対して聖母がお示しになったあの無言で寛容、そして積極的な心の広さにならなさい。そして、さらに、ベトレヘムのかいは桶からカルワリオの十字架にいたるまで、たゆまず「おん子イエズスにつきしたがう聖母」にならなければなりません。聖母がたえずあなたがたにほほえみかけ、つねに守り導いてくださるよう祈りましょう。

マリヤと共にとなえる祈り

ロザリオにすべてを託そう

聖母マリヤはまさしく、私たちの祈りのつねにかわらぬ中心です。乞い求める人々の先駆けです。聖母は全能の仲介者なのです。ナザレトの家で大天使ガブリエルと話したときもそうでした。聖母はそのとき祈りのさなかにありました。祈りのさなかな御父なる神はマリアに語られます。祈りのさなかな永遠のみことばはマリヤの「子」になられます。祈りのさなかな聖霊がマリヤにくだります。

さらにナザレトから聖霊降臨の高間まで聖母はこの祈りをつづけていきます。そこにはすべての使徒がおりました。ペトロ、ヨハネ、ヤコボ、アンドレア、フィリッポ、トマ、バルトロメオ、マテオ、アルフェオの子ヤコボ、熱心者シモン、そしてヤコボの息子ユダは皆、マリヤとともに、心をひとつにして祈りに専心していたのです。(使徒行録1・13-14)

聖母はまたイタリアの大地にも同じように祈りの種をまかれました。ナポリから遠くないこの土地は選ばれた土地になりました。その地をきょう私たちは巡礼に訪れているのです。ここはロザリオの聖なる地、すなわちマリヤの祈りの聖殿です。この祈りにおいてマリヤは私たちとともに心をあわせて祈ります。ちょうど高間で使徒たちとともに祈ったときのように。

ロザリオはマリヤと共にとなえる祈り

この祈りはロザリオの祈りと呼ばれていますが、私たちの愛する祈りです。マリヤにささ

げる祈りです。たしかに聖母にささげる祈りではありますけれど、同時に忘れてならないのは、このロザリオの祈りがマリヤとともに祈る祈りだということ。それはマリヤが私たちと一緒に捧げる祈りなのです。祈るとき私たちは使徒の跡を引き継いでいます。私たちは、あたらしいイスラエル、あたらしい神の民の始まりとなった使徒の後継者なのです。ですからここにきてマリヤとともに祈っているのです。聖母と心をあわせ、さまざまの不思議なことに思いをめぐらします。

「そのことをマリヤは」母として「心にとどめ考えつづけた」のでした。(ルカ2・19) いまもマリヤは考えつづけています。そうした神祕のことがらは永遠の生命に関係するからです。どれもみな、この世の終わりにつながるものなのです。神ごじしんに深くかかわることがらなのです。こうした奥義はすべて、とても単純で、きわめて受け容れやすく、また救いの歴史と密接に結びついています。そして、「近づけない光のうちに住んでおられる(ティモテオ前6・16) その神に深く関係しているのです。

ロザリオにすべてを託そう

ですから、神ごじしんの光と深く結びついているマリヤの祈りは、同時に、つねに大地に向っても開かれていくのです。その祈りは、人間のあらゆる問題を受け容れてくれます。どのような団体、家族、国家の問題であろう

とも、受け容れてくれるのです。この祈りは国家間の問題にも開かれています。そのなかには、たとえば(さきごろ)国際連合総会で、わたたくしがたまたま言うことをえましたような問題もあるでしょう。教会のすべての使命もこのマリヤの祈り、このロザリオの祈りに託すことができましょう。教会の直面するあらゆる難題、希望、迫害、無理解、そして、ひとりひとりの人間や国々のために教会がなしとげたいと思うあらゆる仕事を、この祈りに託しましょう。

じつに、母は心そのものです。そしてこの祈りはこの母の心のなかで形づくられてきました。しかもその心は母としての経験のなかでもいちばん輝かしい経験、つまり、ご託身(受肉)の奥義に立ち会ったのです。

神が次のような預言をお示しになったのは、はるか昔のことです。「処女がみごもって、子を生むであろう。その名はエンマヌエルと呼ばれるであろう」(イザヤ7・14) エンマヌエルとは「神はわれわれと共においでになる」(マテオ1・35) という意味です。神は私たちと共にあり、私たちのためにまします。それは「散っている神の子らを一つに集めるため」(ヨハネ11・52) なのです。(一九七八年十月)

マリヤの取り次ぎを願って

ロザリオの聖母のミサを祝うのはわたくしにとつてたいへん大きな喜びです。聖母マリヤよりもみごとに、きわめて質素な生活を送り、しかもそれを聖化させたひとがいるでしょうか。聖母マリヤよりみごとに、イエズスにつきしめたい、喜びと苦しみと栄光に満ちたその生活を共にし、子として御父に感じた親しみ、兄弟として人びとに感じた親しめ、そうしたイエズスの気持ちのなかに入りこんだひとがいるでしょうか。聖母マリヤよりみごとに、御子の栄光に深くかわり、私たちのための取り次ぎを果たせるひとがいるでしょうか。

あなたがたの生活は聖書とともにあらねばなりません。この使命を聖母に委ねましょう。まさにそのために教会がすすめるものこそ、たいへん

簡単な祈り、ロザリオの祈りにほかなりません。ロザリオの祈りは、日々の生活のリズムにあわせて、静かにつまぐることができます。ロザリオの祈りをゆっくりと唱えながらその奥義を深く心に思い浮かべるならば、家庭においても、社会においても、また個人的にも、キリストとその御母のこころのなかに次第に入っていくことができ、私たちの救いの決め手となっているすべての出来事を、思い出すことができるでしょう。アヴェ・マリアを次に唱えるうち、神の光と静けさのなかで、キリストのあがないについても、さらには私たちのめざしている目的についても、深く見つめることができます。聖母マリヤとともにあれば、聖霊に対してたましいを開いていくことができます。そうすれば、あなたがたを待ち受けている偉大な仕事とは何か、また、どのように果たすべきか、すべて聖霊がおしえてくださるでしょう。御母であるマリヤとともにいるなら、いのちのいなない手たるわたしたちの役割、家庭の守護者、教育者としての役割を、立派にやりとげていけるであります。

(一九七九年十月)

説教・講話・書簡等の抄記

グアダルーペの聖母への祈り

教会の御母

無原罪の処女、まことの神の御母、教会の御母なる聖マリア、御身は、ご保護を願うすべての人に慈しみとあわれみをお示しになります。子としての信頼をこめてささげる祈りをお聴きください。唯ひとりの救い主御子イエズスに祈りの取り次ぎをお願いいたします。

すべてをささげる

なさけ深い御母、御身は慎しみ深く隠れた犠牲の師であられる。すすんで私たちとの出会いをお求めになる御身に私たちが罪人はききょう、みずからの存在と愛をことごとくおさげいたします。私たちの生命と仕事、よろこびと病と苦しみをすべてお受けください。

平和と正義の母

平和と正義と繁栄を民々にお恵みください。私たち自身の持っているものもことごとく母で

あらせられる御身におまかせいたしますから。

イエズスへの忠実を

あますところなくすべてを御身におさげいたします。教会に現存なきイエズス・キリストへのまっつき忠実の道を、御身と共に歩ませてください。ど



うか、御身のやさしい御手がつねに私たちを支え、導いてくださいますように。

司教のために

グアダルーペの処女、アメリカ諸国の御母、すべての司教のためにおねがい致します。司教方が、確たるキリスト教的生活

および神と人々に対する謙虚な奉仕と愛の道へと信者を導くことができまますように。

司祭と修道者のために

この豊かな収穫に御眼を留めてくださり、主が神の民全体に聖性への熱意をお与えになるようお取り次ぎください。聖母のとりなしによって、神の奥義の分配者となる篤信の司祭と修道者を大勢、主が召しだしてくださいますように。

家族のために

生まれくるいのちを愛し、たとぶための恩寵をわたしたちの家族におめぐみください。神の御子をお宿しになったとき、御身の御心に燃えたその同じ愛をおあたえください。うるわしい愛の御母マリア、家族が一つに一致を保つようご保護をおねがいいたします。子どもたちを養育するわたしたちを祝福してください。

秘跡に対する愛を

私たちの希望である聖マリア、慈しみの御まなざしを向けてください。つねにイエズスのもたかけよるべきことをお教えください。倒れたときも、すぐに立ち上り、告解の秘跡にあずかって罪を告白し、心の平安を取りもどして、ふたたびイエズスのみもとにはせ寄ることのできるよう、力をおめぐみください。秘跡はこの世における御子の足跡と称されます。秘跡に対する深い愛をお与えください。

よろこびと平安を

かくて聖母よ、良心には神の平和を保ち、悪と憎しみを捨て、御子イエズス・キリストのたまわる真のよろこびと平和をすべての人々にもたらすことができることでしょう。御父と聖霊と共に世々に生き、治められた御子キリストの御名によって。アーメン。

忠実な処女

信じるよこらに從つて生きる

聖母の子である信者は何世紀もの間、いろいろな名で聖母を呼びならわしてきました。なかでも連禱のうちのひとつ「信実なる童貞」(忠実な処女)という称号には非常に深い意味があります。そこで、信実なる童貞(忠実な処女)と呼ぶことによって何を言いあらわしたかったのか、どのような点で忠実・信実と言えるのか、について考えてみましょう。

さがしもとめる

信実(忠実)の第一点は探し求める姿勢と言えるでしょう。神のご計

画が自分と世界にとってどれほど深い意味をもつかを考えると、神のお告げのとき、聖母は「どうしてそのようなことがおこるのでしょうか」とたずねました。この探し求める姿勢は、旧約聖書において、このうえなく美しく深い霊的意味を秘める表現となつて記されています。「主のみ顔を捜し求めると。熱烈に、辛抱よく、心おしみになく求め

はできております。ご計画をお受けいたしました。これこそ忠実な態度、つまり人間に

はできており、悟った瞬間であり、かとうい理解し得ないところが多々ある、たとえ少しわかったとしても理解しつくせない。ところで、そのときこそ、奥義を受け入れるべきとき、「すべてのことを心にとどめ思いめぐらせていた(ルカ2・19)」聖母の姿勢が、わたしたちの心のなかで実現すべきときなのです。奥義にみずからをゆだね、神がお住いになれるように心を開くべきときなのです。もちろんそれは、馬鹿げたこと、不可解なことに対してなればあきらめの態度をとることではありません。奥義を受け入れるということは、啓示された奥義に対して完全に従うとき、つまり信仰するとき、決定的に実現するのです。

信じるよこらに從つて生きる

忠実の第三点は首尾一貫した生き方と生きることで、信じるよこらに從つて生きることで、信じるよこらに從つて生きることで、信仰と生活との分裂をゆるすよりは迫害を忍ぶほうがよいとする態度のことなのです。これが首尾一貫した姿勢、忠実の中心点と言えるのではないのでしょうか。忠実がほんものであるかいなかは時を経て忠実でありつづけることができるかいなかにかかっています。そこで、忠実の第四点が大切になります。

忠実を保ちつづける

第四点は、着実・志操堅固といわれる姿勢、つまり、たゆまず堅忍する態度のことです。一日あるいは数日間、変らぬ態度を続けるのは容易です。なにもかもが巧く運んでいるとき、忠実な態度を堅持するのは簡単です。しかしひとたび難儀にであうと難しくなります。ところで、生涯を通じて信仰と首尾一貫した

不変の教え

家庭と家族

さいわい、さきごろの公会議でも、いくつかの公文書によって、親の使命は、「まず第一のしかもおもなる教育者」たるにあり、他をも

さいわい、さきごろの公会議でも、いくつかの公文書によって、親の使命は、「まず第一のしかもおもなる教育者」たるにあり、他をも

さいわい、さきごろの公会議でも、いくつかの公文書によって、親の使命は、「まず第一のしかもおもなる教育者」たるにあり、他をも

親は最良の教育者

家庭の雰囲気がつくるよい教育

生活を送ることができて始めて、忠実であつたと言えるのではないだろうか。聖母マリアの「なれかし」は、十字架のもとでくりかえされる沈黙の「なれかし」によって、完全な状態になりました。公に受け容れながら、陰で裏切る人が忠実であるとは言えません。聖母の教えのうち特に大切な教え、それはこの忠実であると思うのです。私教皇はみなさんの忠実な姿勢に接してよるこびを得ると同時に、みなさんからさらに忠実な生き方を期待しております。祖国では、「ポーランドよ、つねに忠実であれ」という習慣がありますが、私はみなさんにも申しあげたい、つねに忠実であつてくだ

さいと。(メキシコ訪問の時)

聖母を毎日の生活の中に

みなさん、聖母マリアへの信頼にみちた優しい愛を大切に育んでください。聖母信心こそみなさまの特長なのです。聖母への愛がなまぬるくならぬよう祈りたいと思います。気持だけの愛ではなく、具体的なおこないにあらわれる愛でありますように。教会がいにしえから伝えてきた信者のわざを大切にしましょう。お告げの祈り、五月の聖母月、とくにロザリオの祈りをせび続けてください。昔さかんであった家族そろって唱えるロザリオの祈りなど今も続いているのです

聖母信心は信仰生活のみなもと

が、そのすばらしい習慣がふたたび多くの家庭でさかんにありますように。アパレシダの聖母像が事故でこわれたのは残念なことです。しかし、無数のかけらのなかで、両手であわせた聖母の御手がみつかったということがです。これはひとつの象徴と考えることができます。聖母の御手は毎日の生活のなかに祈りをいれるようにという招きである、と考えられるのです。祈りがなければ、すべては効果も意味も失ってしまいます。ほんとうにマリアの子であるなら、かならず祈りの人であるはずなのです。

マリア信心は深いキリスト教的生活を送るためのよりどころであり、神と隣人に仕えるための力のみなもとであります。マリアの教える学校で学びたいものです。聖母のおおせに耳をかたむけましょう。神の御母の模範にならいましょう。聖書をよむと、マリアはわたしをイエズスのもとに導いてくださいます。「なんでもあの人のいう通りになさい」と。カナの婚宴で、マリアは当事者たちのそぐうした問題をイエズスに告げました。そして望み通り恵みをうけてその問題を解決したのであります。聖母マリアと共に、聖母を仲介として祈りたいと思います。マリアはつねに、神の御母であり、わたしたちの御母であるからです。(一九七九年七月四日)

教皇たるわたくしの常にかわらぬ喜びは、キリスト教の信者が担っている教育者としての責任を、それぞれの家庭にあってここに深くとどめてある父親母親に会うことです。こんにち教会のなかで、家庭の擁護をめざし数かきりない運動がはじめられていのは、神の恵みでありましょう。人間教育、キリスト教教育における家庭の役割の大切さを、あなたがたを前にしてあらためて強調するにはおよびません。さいわい、さきごろの公会議でも、いくつかの公文書によって、親の使命は、「まず第一のしかもおもなる教育者」たるにあり、他をも

らに親は、調和のとれた教育をほどこす最良の教師でもありません。なせならそこには、親と子のあいだがらというまったく根源的な性格、さらに親がその愛をかかやかせてこそ生みだせる慈愛と安らぎの雰囲気、こういうものが見られるからです。(「現代世界憲章」52参照)たいていの市民社会では、初期教育における親の役割の特殊性、必要性がみとめられねばならぬとされてきました。(…)

巧みな技術をこそ、神の恵みによって、手に入れなければならないのです。それには、両親がいっしょになって、さらには、ほかの家庭の親や教育の専門家、司祭たちとともに、親自身の道徳上の信念と宗教上の信念を確固たるものとし、みずからの経験についても反省を深め、模範をたれねばなりません。問題の本質は、おさない子どもや思春期の青少年の手だすけをして、「健全な道徳的判断をくだし、それを本人の責任において実行にうつし、ますます完全に神を知り、愛する」ようにさせる点にあります。(「キリスト教教育に関する宣言」1)子どもたちの分別心、意志、信仰をこのように教育することは、まったくもって技術そのもの、芸術です。信頼、対話、堅実さ、自由の萌芽を尊敬するとはどういうことかを正しく理解させるような雰囲気は家庭にはなければなりません。その雰囲気とは主との出会いをまねくようなすべのもののもつ雰囲気であり、子どもがすべのもつよい習慣、しかも将来その子が立派なおとなになるにも役だつような、よい習慣を徐々に手ほどきしてくれるものすべてがもつてい

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説するにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料五十円 半分予約約三百六十円送料三百四十円 一年予約約七百二十円送料六百円 (一部の送料で三部送付可能) 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 072393